



母の胸に抱かれて

それは、久しぶりに家族を訪問していた中、妹家族も含めて実家に皆が集まっていた時のことです。一緒に囲んだ食卓も、子どもたちのお風呂も済み、そろそろ「お帰り」の支度となった時のことでした。姪っ子が急に腹を立てて、母親であるわたしの妹を叩いて、怒りはじめたのです。始まりは小さな子供が突然かんしゃくを起こす、どこにでもある家族の風景でした。おそらくいつもなら、眠たいのだろう、という大人の苦笑で済んでしまう、そんな小さな日常の一コマでした。

ところが、その夜のわたしの妹は違いました。叩こうとする子供を引き寄せて、「どうして叩くの、なんでそんなことするの?ママのこと叩いていいの?」と問いかけたのです。妹の厳しい表情に、姪は泣き出しました。妹はさらに続けて、「怒ったら人のこと叩いてもいいの?〇〇ちゃんはまだ大きくなったんだから、分るでしょう。人のこと叩いてもいいの?」と問いかけ、真剣に姪と向き合いました。姪は泣きながら首を振っています。「人のことを叩いたら、なんて言うの?」。

それからは、「ごめんなさい」が言えるまでの母と子の根競べが始まりました。先に父親と上の子は帰ってゆき(妹の家は実家から目と鼻の先なのです)、居間は静まりかえりました。わたしは近くのソファで本を読んでいたのですが、本の内容はそっちのけで、こっそり二人の様子を見守っていました。

妹は床に腰を下ろし、座った足の上に姪を乗せて向き合いながら、辛抱強く繰り返しました。「ごめんなさい、が言えるまでお家には帰らない」。姪は大粒の涙をこぼし、眉をひそめ、怒りや戸惑い、悲しさや自分の意地などの様々な感情でないまぜになった様子で、混乱してなかなか落ち着くことができません。何かを言いたくても、とても言葉にならない状態でした。妹はそのような姪の眼をじっと見つめながら、静かに待っていました。長い時間がそのように過ぎてゆきました。

二人の膠着状態に変化が見られたのは、妹が姪を抱き寄せた時のことでした。「ママは〇〇ちゃんが本当は悪かった、って思っていることを知っているよ。でも、ちゃんと言葉に出してごめんなさい、が言えるようになってほしい」。母親の胸に抱き寄せられて、姪はしゃくりながら声を上げて泣き出しましたが、やがて静かに落ち着いてゆく様が手に取るようにわかりました。

「ごめんなさい、が言える?」再び胸を離しながら問いかけた妹に対して、姪は口から飛び出てくる嗚咽と戦いながら、それでも最終的にやっと小さな声で「ごめんなさい」が言えたのでした。それは一時間にわたる長い道のりでした。小さな一步を遂げた親子は、喜びの内に夜道を帰ってゆきました。

やりとりを眺めていたわたしは、教育と言うものの何とも言えない尊さを覚えていました。かくも長い時間と労力を費やして、わたしたちはゆっくり人間として成長してゆくのです。人間が本物の人間になるためには、一体どれほどの「関わり」を必要としているのでしょうか。

長い道のりを経て築かれる教育は、何も親子や人間同士に限ったことではありません。人間以上に神こそ、人間の尺度を超える気の遠くなるような長い時間をかけて、わたしたちを教育されてきました。それは旧約においては何度も繰り返し描かれる、背信の民の姿と、その民を導き養い育てゆく神の姿であり、さらに神の教育はイエスにおいて全き「言葉」となります。

教育は人格同士の尊重があってはじめて実りを結びます。自由であるがゆえにわたしたちの歩みは遅く、時には真理を拒み、横道にそれて過ちを犯すこともあります。あの失われた羊のたとえのように、よき牧者は鞭やこん棒を使って羊を支配するのではなく、ご自分から失われた羊を探し求めて出歩くのです。羊飼いの心には、羊への愛とともに忍耐と許しがあります。

いつでも神の許しは、わたしたちの「ごめんなさい」に先立ちます。母の胸に抱かれて、受け入れられ、やさしく背中をなでてもらったことで、力を振り絞って「ごめんなさい」が言えた姪の姿は、そのままわたしの姿なのです。あのように足りない自分を全くそのままに受け入れられているからこそ、わたしたちは神に向かって許しを願うことができるのでしょうか。

シスター岸 里実